

支えてくれてありがとう

北九州市立沖田中学校3年 進藤 知佳

中学一年の冬、私は学校に行けなくなった。行けるようになった今でも、理由は分からぬ。自分でも、どうすればいいか分からないまま時間はどんどん過ぎていき、友達とどのように笑い合っていたのかも忘れていた。私一人が取り残されているように感じた。

そんな時、担任の先生が「ちょっとずつでいいよ」と言ってくださった。一見普通の言葉でも、その時の自分にとって、すごく救われた言葉だった。他の生徒がまだ登校していない朝早い時間に学校に行っていた時に、教科の先生も声をかけてくださった。スクールカウンセラーの先生も親身になって話を聞いてくださった。

学校には行けたものの、まだ教室に入るのは難しかった時、オンライン授業を勧められた。タブレットを通してクラスの様子をのぞくと、ザワザワとした自分のよく知る空気感にほっとした。

あとで知ったことだが、スクールカウンセラーや、オンライン授業の環境整備には、税金が使われている。先生方の働く環境、タブレットや通信整備、さらには義務教育そのものも税金が使われている。当時は、なんにも感じていなかつたが、どれにもこれにも税金が関わっている。そのことにびっくりした。

私は、税金は道路や建物をつくるためだけのものだと思っていた。しかし実際には人ととの繋がりや、私たちの心の安全も支えている。もし税金がなければ、私が話を聞いてもらうことも、クラスの雰囲気を知るためのオンライン授業もなかったかもしれない。そう考えると、自分は一人ぼっちではなかつたのだと思う。それも全て、税金が私と周りを繋げてくれたからだと思う。

あの時の支えがなければ、今の私はきっと学校には戻れていなかつたかもしれない。少しずつ登校日を増やし、また友達と笑えるようになったのは、先生方の励ましと、税金があったからだ。私は初めて税金というものを身近に感じた。

今、私は消費税を払うという形だけで納税している。十パーセントでも高いと感じていた税金だが、中学生である私の心の支えになってくれた事を思うと、目には見えないこの十パーセントの力が、とてもありがたく、大切な物だと思った。

私は十五歳。働くようになれば、所得税や住民税も払うことになる。私の心を支えてくれたこの恩は、納税という形で返さなければならないと思う。自分の払う税金がこれから先、誰かの「居場所」や「やり直しのチャンス」になることを忘れない。